

(別紙様式 = 中学校用)

都道府県番号	40
都道府県名	福岡県

【 】

*重点をおいた観点にチェックすること

学校名及び規模

学校名	瀬高町立瀬高中学校					
学年	1年	2年	3年	特殊学級	計	教員数
学級数	5	5	6	1	17	30
生徒数	181	195	230	5	611	

研究の概要

(1) 研究主題

基礎・基本の確実な定着を図る授業の創造
～くり返し学習を通して～

(2) 研究主題設定の趣旨

近年、我が国では科学技術の進歩や経済の発展によって、高度の情報化社会となった。経済成長を追い求め豊かさを実現した結果、あふれる物と情報に取り囲まれ、我々はそれらを受動的に受け入れて、工夫したり創造したりする意識も薄れつつある。お金を出せば欲しいものが手に入る世の中、検索すれば自分で創造する必要もなく、自分で深くものごとを考える必要のない世の中になった。このような社会の変化に対して、中学校学習指導要領は「自ら学び、自ら考える力」を育成し、「基礎的・基本的な内容の確実な定着」「個性を生かす教育の充実」をねらいとして明記している。中でも、「基礎・基本」の指導については、中教審答申において「厳選した教育内容、すなわち、基礎・基本については、一人一人が確実に身に付けるようにしなければならない。豊かで多様な個性は、このような基礎・基本の学習を通じて一層豊かに開花するものである。」と述べられている。学習指導要領が「最低基準」とされ、当該学年の学習内容を超えた発展的学習も可能になったが、やはり、「基礎・基本あつての発展」である。その当然の立場に立って、本主題を設定した。また、日常の授業における本校生徒の姿は、学習態度は真面目であり、実験や実習、操作活動など、行動を伴う活動を中心とした学習には、意欲をもって主体的に取り組むことができる。しかし、実態調査(各学年より1学級抽出して実施)をしたところ、「わからないことは進んで質問している」と答えた生徒は33%(4段階自己評定尺度法; 4または3, 以下同)、「難しい問題にも進んで挑戦している」と答えた生徒は36%であった。よって、自己の課題を根気よく追求し、解決を図ろうとする姿勢は十分ではないといえる。さらに、自己の考えをまとめたり、筋道を立てて考えたりするような学習に対してもあまり意欲を示さない。「基礎・基本」を、「知識」の量だけでなく、「思考・判断」「意欲・態度」等といった観点からも捉える立場をとる以上、本校生徒の「基礎・基本」は十分に定着していないと判断せざるを得ない。よって、本主題に基づいた校内研究の推進は、意義あるものと考えられる。

研究の概要

(1) 研究推進体制の工夫

組織面

研究推進委員会を以下のメンバーで構成した。

・校長、教頭、教務主任、研究主任、各学年から1名

校内研究と本事業とのタイアップを内滑にするために、研究主任がフロンティアティーチャーを兼任した。

実践交流会の反省をもとに、5教科から1名ずつ入るよう、研究推進委員会を拡大した。

運営面

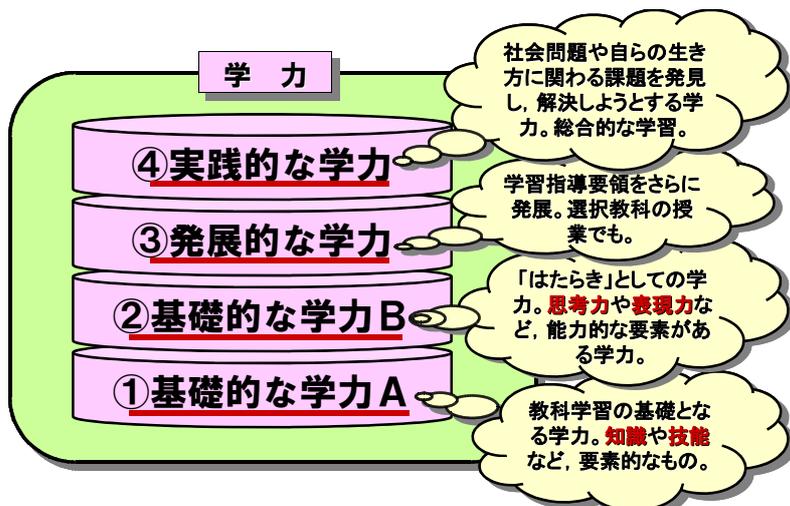
研究推進委員会を週時程の中に位置づけ、協議の時間を毎週確保した。

研究推進委員会での協議を充実させるため、研究主任は原案を事前に、校長、

教頭、教務主任と審議した。

教科部会が機能するよう、まず拡大研究推進委員会で各教科論を審議した。

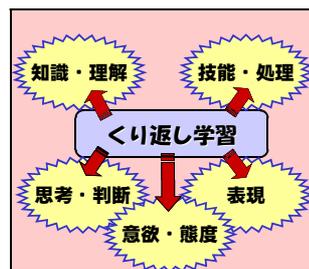
- (2) 研究の実際
 「学力」および「基礎・基本」のとらえ
 本校では、「学力」を次のように4つの視点でとらえた。



「基礎的な学力A」と「基礎的な学力B」は、学習指導要領で明示されている目標と内容に基づく教科の学力である。本校では、教科の本質ともいえる「基礎的な学力B」と、それを支える「基礎的な学力A」を、「基礎・基本」ととらえる。

「くり返し学習」について

最近、学力低下問題に対して、教育界のみならず社会全体でその対策が模索されている。しかし、そこで議論されている「学力」は、主に知識・理解や技能であり、その論調からすると、くり返し学習といえば、知識や技能の定着をねらったドリル学習が連想される。しかし上述の通り、学力はそればかりではない。思考力や表現力なども学力である。本校では、くり返し学習指導を広くとらえ、「知識・理解や技能ばかりでなく、思考力や表現力などもくり返し学習で育てることができる」という仮説に立った。



「くり返し学習」の手順

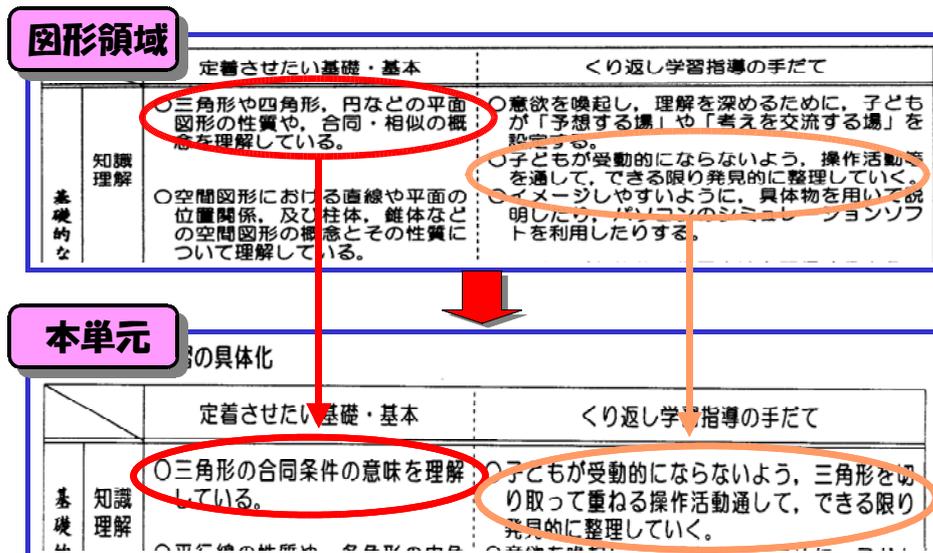
各教科、次のような手順をふまえて「くり返し学習」を設定する。

- <1> 「基礎的な学力A」「基礎的な学力B」それぞれにおいて、定着させたい基礎・基本を明確にする。 【資料1】の左側
- <2> それらを定着させる手だてを明確にする。 【資料1】の右側

【資料1】数学科、図形領域における「基礎的な学力A」の具体化

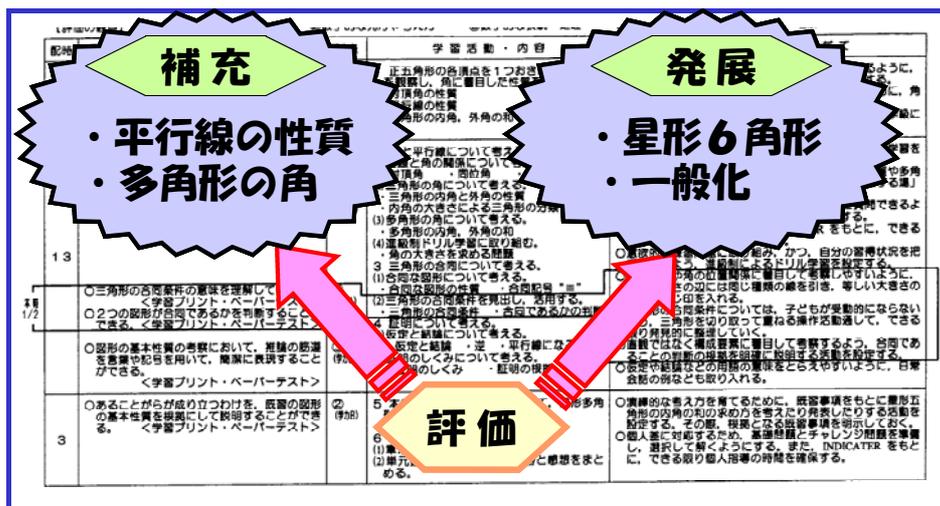
		定着させたい基礎・基本	くり返し学習指導の手だて
基礎的な学力A	知識理解	<ul style="list-style-type: none"> ○三角形や四角形、円などの平面図形の性質や、合同・相似の概念を理解している。 ○空間図形における直線や平面の位置関係、及び柱体、錐体などの空間図形概念とその性質について理解している。 	<ul style="list-style-type: none"> ○意欲を喚起し、理解を深めるために、子どもが「予想する場」や「考えを交流する場」を設定する。 ○子どもが受動的にならないよう、操作活動等を通して、できる限り発見的に整理していく。 ○イメージしやすいように、具体物を用いて説明したり、パソコンのシミュレーションソフトを利用したりする。
	処理技能	<ul style="list-style-type: none"> ○定規とコンパスを用いて、角の二等分線や垂線など、基本の作図が正しくできる。 ○図形の性質を用いて、角の大きさや面積、体積など、図形の計量を行うことができる。 	<ul style="list-style-type: none"> ○子どもが主体的に作図方法を習得するよう、次の点に留意する。 <ul style="list-style-type: none"> ・単元の導入で、作図できない経験をさせ、課題意識と学習の見通しを持たせる。 ・操作活動を通して発見的に整理する。 ○意欲的に取り組み、かつ、自分の習得状況を把握できるよう、進級制によるドリル学習を単元に位置づける。

<3>それぞれの手だてを授業レベルで具体化し、各単元に位置づけてくり返す。
【資料2】2年数学科「図形の性質と合同」での具体化



<4>定着したかの評価を行い、それによって補充的な学習にフィードバック、もしくは発展的な学習にステップアップする。

【資料3】2年数学科「図形の性質と合同」での補充、発展の例



(3) 研究の成果と課題
「基礎・基本が確実に定着したか」という検証については、学年末に「観点別到達度学力検査(TK式DRT)」を実施し、成果を分析することとしているので、ここでは教師の立場での成果と課題を述べる。

成果

「基礎的な学力A、B」を整理する中で、我々は教科指導を通して生徒にどんな力をつけようとしているのか、学習指導要領をもとにじっくりと考える機会を得た。また、「基礎的な学力Aが基礎的な学力Bを支える」という考えに立った分析により、一つの単元の中だけでなく、単元と単元、領域と領域のつながりを意識するようになったし、教科指導の本質は何かを考えるきっかけとなった。

課題

- ・各教科での「基礎的な学力A、B」のとらえ、および、その定着をめざした指導の在り方の再考。特に、「基礎的な学力B」の指導方法の開発。
- ・補充的な学習や発展的な学習など、個に応じた指導の充実。
- ・検証方法の確立。

(4) 研究成果の普及の方策

校内においては、全体研や教科部会を通して、研究成果を交流している。他校に対しては、公開授業や実践交流会を通して、その普及に努めている。

